

素材採取家の 異世界旅行記

MATERIAL COLLECTOR'S ANOTHER WORLD TRAVELS

18



木乃子増緒

KINOKO MASUO



ヘームスケルク
 デオスィラゲル公爵家
 家令として
 ショペンに仕える。

ショペン
 ストルファス帝国の公爵。
 クレイとは旧知の仲。

クローフ
 デオスィラゲル公爵家
 執事として
 ショペンに仕える。

タケルの仲間 **蒼黒の団**



クレイ



フロライト



フニさん



スッス

サテル
 ストルファス帝国の
 皇太子で、
あかし
 クレイの元主。



ピー
 タケルの相棒の
 子ドラゴン。
 タケルとカニが
 大好き。

タケル
 ひょんなことから
 異世界で「素材採取家」
 となった本作の主人公。
 食べることと
 お風呂が大好き。

主な登場人物

十 十 十 十 十

進学や就職、転職や引越など生活に変化が訪れると、はじめは緊張と興奮でしばらく落ち着かない日々を送るもののだが、いつの間にか慣れてしまうものだ。

人は慣れる生き物。

たとえ嫌なことでも、良いことでも。

それは順応能力とも呼ばれる、様々な環境に慣れる力。

だが生活に慣れると緊張と興奮は失せ、代り映えない日々刺激が欲しくなったりするという、なんとも面倒で我儘な^{わがまま}氣質が備わっている。それが、人間。

いやしかし、マンネリ化を解消するための刺激を求めるのは我儘なのだろうか。いいや違う。刺激や変化といったものがなければ、人は成長を止めてしまう生き物だ。それが良いか悪いかは個人の考えを尊重したい。俺は刺激を求める。ほどほどにね。

そんなこんなで異世界マデウスに転生してから数年しか経過していないけれど、未だにマデウスに順応しているように思えない素材採取家のタケルです。皆さん、お健やかに過ごされておりますでしょうか。

前世の常識はマデウスでの非常識。

わかっちゃいるけど日本での生活が長いものだから、どうにもこうにもマデウスでの生活は慣れない。

順応していかないというか、やはりまだどこか他人事のように考えている自分が僅かに残っている。ちよびつとだけど。

蒼黒の団の仲間が家族同然だと思っているし、ビーに至っては俺が育てた我が子と公言しよう。

ビーが成竜になって一度は別れる覚悟をしたが、ドラゴンとしては経験が浅いということ。今しばらくは俺の傍に寄り添ってくれている。いやもうおうち帰らなくていいからね。俺の傍がビーのおうちだよ。

チーム蒼黒の団の拠点があるトルミ村での風景は、一応、慣れはした。決して慣れないと言いか慣れてたまるものかと思う状況もある。

村の中央広場に供えられた緑の精霊王と古代馬を祀る祭壇に、むっちりどっちゃりとした緑の精霊王がたまにドヤ顔で座っている光景は見るたびに激しく動揺する。アレは何度見ても慣れませぬ。

ところで俺の趣味は数多あるのだが、その一つに『快適に眠ること』がある。

睡眠は人間の本能なのだからそこは趣味ではないんじゃないか？ と、よく言われるのだが黙らっしゃい。眠らなければならぬのなら、眠りにこだわるのはすなわち人が快適に生きたいと思う

本能なのではなからうか。人は眠らないと死ぬんだぞ。

ましてや不思議世界マデウス。便利な魔法はあっても快適無敵の高性能マットレスなど存在しないのだ。かなしい。え？ 睡眠魔法があるじゃないかって？ 眠ることにまで魔法を使つてどうする。そういうんじゃないの。快適に眠りたいの。

前世で使っていたお高いオーダーマットレスが欲しくてたまらない今日この頃。

前世の俺は腰痛持ちであったがため、寝具にはこだわっていた。マットレス然り、布団然り、パジャマ然り。

コイルマットレスはマデウスに存在しない。

庶民が利用する寝台は、基本的に足つきの台。だがしかし、藁を敷き詰め白い布をかけただけのもの。良くてペラペラ綿敷布団。

通気性は抜群だが、藁はぶっちゃけ虫が湧くかもしれないので怖い。いくら清潔魔法で衛生面を管理しても、天日で定期的に干しても、数か月でへたってしまう。夏場は涼しくても冬場は恐ろしく寒いのが難点。

貴族の無駄にでっかい寝台は綿をこれでもかと詰め込んで作られるので、程よい弾力は皆無。かといって綿をスカスカにして作ると貴族のくせにケチだと言われてしまうのだとか。貴族つて妙な矜持に縛られていて時折可哀想に思う。

そもそもマデウスにマットレスが存在しなかったのには驚いた。泣いた。どれだけの高級宿だろ

うと、分厚く硬い敷布団のみ。国王陛下が利用される寝台も、絹のシーツにレインボーシープの綿が使われているが、高級宿と似たような敷布団だった。

そんなわけで腰痛持ちのアルツェリオ王国大公閣下であらせられるグランツ卿から、腰に優しい寝具開発を頼まれたことがきっかけでマットレス開発を始めた。国王陛下もデスクワークが多いから、腰が痛いのだと。同じく俺も腰がくなんて日常会話としてうっかり喋ったせいではある。

最近のグランツ卿、俺に頼めば何かしら解決してくれるのだと勘違いしているんだよ。そりゃあ、頼まれれば愚考致しますとも。俺も快適マットレスが欲しかったわけじゃないんだからね。もう少し敷布団やマットレスは改良の見込みがあると俺が意気込んでいたら、寝るために何をそんなにこだわるのだとクレイに言われてしまった。うるさいよ。寝ることだって俺の大切な趣味の一つなのだからこだわらせてくれ。

柔らかい水鳥の羽根を幾重にも重ねたもちもち感覚のかけ布団と、レインボーシープの綿をほどよく詰め込んだもちもち感覚の敷布団は程よい弾力。もう少し腰の部分は高反発気味であると嬉しいが、なかなか開発が難しい。今世の俺は腰痛とは無縁なんだけど、それはそれ。

グルサス親方にマットレス用のコイルを開発しておくかと相談した俺が叱られたのは言うまでもない。鍛冶職人に得体のしれないモン注文するんじゃないと怒鳴られた。

だがしかし、素人ながらにもコイルマットレスの仕組みを精一杯説明し、これはバネにもなるから馬車のスプリングとして応用することも可能だと伝えれば鍛冶職人たちの目の色が変わった。

鉱石を加工するのはドワーフたちの腕の見せ場。

どうにかこうにかしてコイルマットレスを開発していただきたいものだ。

そんなわけで俺は今、考えるよりも先に身体が動いているのです。

波乱は向こうからやってくる

【ロードゲーニク・ヴォウヴォットリア・サテル・サテリアル】

ストルファス帝国皇位継承者第一位。二十一歳。現在失踪中。

オルジェダーワ・ハウイラテル・ラテリアル現皇帝の第二子。

ケルラツシュ・ダヴィダリオア・ユリタ・ユリアルの双子の弟。

ギルディアス・クレイストンに多大なる恩を感じているクレイストン崇拝者。クレイストンを崇拜する『聖龍団』の隠れ団員。

『隠蛇の帳』の惣領であるヒディ率いる一派に拉致され、帝都西の孤島ビオに捕らわれていた。

長い間必要最低限の食料と水分だけ与えられていたため、極度に衰弱している。

栄養失調・免疫機能低下・骨粗鬆症・脱水症・貧血・不整脈・気鬱・意識喪失。あと十日で死ぬかも。
完全回復薬は半一滴を重湯に混ぜて服用させることを推奨。

サスケの腕の中でぐったりと力なく横たわる金髪の青年。

見た目は元の面影がわからぬほどに痩せてきている。それでもクレイはこの青年を殿下だと言った。数年会っていないというのに、しかも痩せて元の姿とはかけ離れているはずなのに。何だろう。主従にわかる特別な何かがあるのだろうか。

さてはて、これは今まで見た腹ペコ連中とは状況が違う。

手足は骨の形がわかるほど。顔色は限界まで悪く、土色というか人間の顔色には思えない。きつと太陽の光で輝くだろう美しい金の髪も、長い間放置されていたのかげさばさ。洗ってもいないのだろう。失礼だが、少し臭う。極限の飢餓状態。

えーつと、えーつと、とりあえず栄養失調つてことだよな。きつとアシユス村の人たちやアルナブ族たちよりも腹が減っている。弱っている。腹が減っているどころか合併症——栄養失調に伴う内臓異常まである。不整脈つて心臓とかそういう系のアレだよな。

俺は医師の心得は全くないが、目の前の青年が危篤状態だというのは理解できる。あと十日で死ぬとか簡単に教えてくれるな。いや、お陰様でとにかくすぐさま治療しなければならぬとわ

かった。

魔力の調整をせず無我夢中でお伺いを立てた調査先生の回答は、ちよつとだいぶかなりの予想を上回る情報を教えてくれた。情報が、多すぎる。クレイのファンクラブらしき隠れ団員なのは内緒にしておこう。そうしよう。

これは色々とクレイのゲンコツ案件かもしれないが、今はそこを追及している場合ではない。

目の前のガリガリに痩せた金髪の青年、サテル皇太子殿下を安静にさせなければ。

俺は馬車の中を指さし、愕然としていた面々に声をかけた。

「皆、馬車の中に！ サスケさんもそのまま馬車に入ってください！ ビー、お客様用の寝台を一度！」

「ピュッ!? ピュ、ピュイ！」

「プニさんは馬車を移動してください。目立たない、できれば森の奥の開けた場所に移動してもらえますか？ 馬車には強い結界魔法がありますので、Bランク程度のモンスターなら寄り付きません」

——造作もないこと

「ありがとうございます」

後でじゃがバター醤油五個献上しよう。

「殿下！ 殿下あ！ なにゆえこのようなお姿に……っ！ タケル、タケル、なんとかしてくれ！」

頼む！」

普段なら誰よりも冷静に状況を把握するはずのクレイが、サテル殿下の状態を見て我を忘れている。頭をこれでもかと下げると、クレイの頭上を浮遊しているハムズたちが慌ててクレイの甲冑かこうの中に入ってしまった。

取り乱したままのクレイがサテル殿下を抱えたら、力加減がわからずサテル殿下の痩せ細った身に傷をつけてしまうかもしれない。

慌てながらもそのことは理解しているのか、クレイは通常の三倍くらいの怖い顔で俺を睨んだ。睨むな。怖い。

「クレイストン、落ち着くのじゃ！ そのように衰弱しきった者を揺さぶるでない！ このような痩せこけた者、わたしは今まで見たことがない……どどどど、どうどう、どうすれば良いのじゃタケル！」

「おいらもここまで細っこい人は見たことないっす！ 郷で飢えていた時もここまで……あああ、兄貴兄貴兄貴！ おいらなんでもするっす！ 何すればいいんす？」

サスケにサテル殿下を抱えてもらいながら馬車内部に移動すると、やっと今の状況を呑み込めたプロライトとスツスが慌て始めた。

周りが慌てれば慌てるほど、俺は逆に冷静になれる。

突如予想もしない事態に陥ると、何故か皆揃って俺を頼るんだよな。信頼されている証なのだろうが、俺だって何でもかんでも応えられるわけではないのに。

だが、そんなこと言っていられない。
大きく息を吸い込み、一度に吐き出す。
冷静になれば考えることができる。

俺に、俺たちにできる精一杯のことをやれば良い。
比べるのは失礼だが、ルセウヴァツハ領の伯爵であるベルミナントの奥方様がイーヴェルの毒に侵されていた時よりマシだ。サテル殿下は幸か不幸か毒は盛られていないようだ。

不整脈はあっても栄養不足が原因だから、ともかくゆっくりと栄養——飯を食わせよう。
「これだけ痩せているのじゃから、肉を食せば良いのではなからうか！」

「いや、無理。ただ腹が減って力が出ない状態じゃない。この場合、えーっと、スツス、粥かゆを作ったことがあるだろう？ コタロがべっちよりぬるぬるって言っていた料理」
「べっちよりぬるぬる……？ ああ、はいはい、わかったっす！ とろとろのコメっすね！」

「そう。そのとろとろのコメを先ず作ってくれないか。ほんの少しだけ塩を入れてくれ」
「はいっす！」

スツスは俺が頼み終わる前に食糧倉庫に直行。

「ピュイ！」

ピーは客室から飛んでくると、用意ができたかと教えてくれた。

「ビー、ありがとう。サスケさん、あそこの部屋の寝台にサテル殿下を。ゆっくりと寝かせてください」

「諾」

蒼黒の団の馬車『リベルアリナ号』には団員それぞれの個室があり、それとは別に客室が用意されている。

どの種族にも対応できるよう、家具は大小二個ずつ用意してある。大柄なクレイがゆったりくつろげる広さがあり、馬車の中とは思えない閉塞感のない部屋だ。

リベルアリナ号はエルフトとユグルとドワーフの趣味が天元突破して出来上がった馬車故、内装がとんでもない。

必要ないと言ったのに、トルミ村に帰るたびに馬車の調整が入るのだが、その都度馬車は魔改造を施されている。やたらと豪華な調度品があちこちに飾られているんだよ。俺の部屋に飾つてある飾り棚、細工が美しいなどと思ったらエルフ作成の一級品。競売にかければ最低価格三千万レイブと聞いて悲鳴を上げた。なんでもん設置しやがった。

後々俺たちがサテル殿下を庇護したことが明るみに出たとしても、この客室で対応したと言えは無礼にはならないだろう。アルツェリオ王国の大公閣下であらせられるグランツ卿すら、この馬車の客室は見事だと太鼓判を押してくれたのだから。

「プロライトはサスケさんの手伝いを」

「了解じゃ！」

「クレイは花蜜入りの水、あれをできるだけ殿下に飲ませて」

「お、俺がか？」

「何か手伝わないと落ち着かないだろう？ いいか？ 相手は体調を崩したユムナだと思うようにちっちゃい、ふわふわな柔らかい子供。手加減、力加減を間違えるなよ。ポッキリぐつきりいっちゃうからな。そうつと、やさしーく、やさしーく」

「お、応」

クレイは戸惑いながらも自ら腰に下げている巾着袋の中から、花蜜水が入っているだろう革袋を取り出した。

「革袋のまま飲ませないこと。匙で少しずつ、飲みたいと思うだけ飲ませてくれ」

「応！」

クレイの言葉に力が入った。よし、冷静さを取り戻せたな。クレイの頭上でふわふわと浮遊する頭虫であるハムズも、心なしかご機嫌そうに見える。

歴戦の勇士であるクレイだ。様々な現場で怪我人や重病人などは見慣れているだろう。騎士は基本的な怪我の手当てもできると聞いた。いつものクレイならサテル殿下の看病ができるはずだ。

サテル殿下を抱えたサスケは客室に移動。サスケについていくプロライト。クレイは台所で匙を調達してから客室へと向かった。

スツスは米を洗い、竈で土鍋を支度中。竈と言っても火は使わない、火の魔石を応用した魔道具だ。IH焔炉に似ている。

馬車がぬるりと動き出した。揺れることは殆どない快適無敵の馬車だが、上下左右、前進後進の動きは些細な振動でわかるのだ。

今はゆっくりと上昇中……だいぶ飛んでいるな。どこまで飛ぶの？ ああ、空飛ぶ馬車なんて目立つから、人の目を避けて移動してくれるんだな。プニさんの心遣いありがたい。

「ピユイ、ピユウ……」

「大丈夫。大丈夫だ、きつと。今は酷い状態だが、きつとなんとかなる。なんとかする」

不安そうに嘆くビーを宥めつつ、俺もぶっちゃけ不安ではある。

だって、どれだけ弱つていようが相手は大帝国の次期皇帝様だ。

俺は一応アルツェリオ王国の国民なので、お隣大陸のお隣帝国はライバルというか、互いに意識し合う間柄なので、もしもこの尊い御方の御身に何か大事があるうものなら……

いやもう死にそうなだけだね。

大事になりまくっているんだけどね。

ここから更に悪化させないよう、細心の注意を払って看病をしなければならぬ。

しばらく馬車の中で容体を安定させなければ。数日身動きができなくなるが、下手に動いて目を付けられるよりマシだ。ここはあくまでもお隣国なのだから。

それからグランツ卿とベルミナントに相談して、判断を仰ごう。療養するならトルミ村かな。隣国の皇太子を無断で連れていっても良いものだろうかとは思うが。

いやだがしかし、劣悪な環境で監禁されていたのなら、連れていっても文句は言われるまい。監禁した連中の首は飛ぶかもしれないが、それは俺の知ったところではないのだ。

そういうえば調査先生によるとサテル殿下には……

「タケル！」

客室からクレイの声が響く。

俺は急いで客室へと飛び込む。そこで見たのは。

大きな寝台に横たわる細い、細い身体。

かさかさに乾いた皮膚。わずかに上下する胸。小さな吐息。

そして、めくられた衣服の下。腕や足のあちこちに。

「……強く打ちつけた、痕じゃな」

プロライトが怒りを堪えた声を絞り出す。

細い腕に醜く残る黄色、青、黒の濃い痣。見ればぼろぼろの衣服にこびりつく、黒いシミ。これは、血か。

天下のストルファス帝国——いやまあ、帝国の首都である帝都がどんなところなのか俺にはさっ

ぱりわからないのだが、アルツェリオ王国の王都よりも人口が多いということはグランツ卿に教えてもらった。

沈黙が続くなか、殿下の無残な姿を目の当たりにし怒りを覚えた。

怒りを覚えたどころではない。今すぐにでもこんな姿にした元凶をぶちのめしてやりたい。王国の城壁に吊るしてやりたい。タンスの角に足の小指をぶつけ続けなければならない。一生頭に鳥のうんこ落ち続ける。

もしも殿下が俺たちと全く関わり合いのない人ならば、俺はここまで憤ることはなかっただろう。仲間が、クレイが仕えていた元主。引退したとはいえ、クレイが竜騎士^{ドラゴンナイト}だった時に慕っていた人物が相手。俺たち蒼黒の団にとつて全くの他人というわけでもない。他人といえば他人のだが、クレイが救いたいと願うのなら、俺たちは力を貸すだけ。

「タケル、治癒魔法は使えるか？」

今にも魔王化しそうなクレイだったが、懸命に堪えている。声と肩が震えていた。

俺だつて内心腸^{はらた}が煮えくり返っているんだ。

何の理由があつて殿下はこんな酷い暴行を受けたのか。

拉致した連中の正体は調査^{スキャ}先生のおかげで知ってしまったので、サスケに探ってもらおう。国内ではサスケ率いる諜報部隊^{ルウェ・ハイズ}を自由に使えとグランツ卿から許しを得ているからな。

俺は鞆からメモ帳を取り出すと、『隠蛇の帳』と書き記しサスケに手渡す。

サスケは何も問わずにメモを受け取り、僅かに頷いて馬車を飛び出ていった。空飛ぶ座椅子の起動音が聞こえたので、きつと即座に蛇のナンタラという謎組織を調べてくれるのだろう。

「治癒魔法を使うのは少し怖い」

「何故に！」

「クレイ、落ち着け。殿下の身体に障るし、馬車の中で魔王になったら客室^{客室}の調度品がぶつ壊れるぞ」

「うぐっ……！」

花蜜水は飲めたのかな。少しだけサテル殿下の呼吸が落ち着いた気がする。

「殿下のお身体から魔力が殆ど感じられないんだ。今の状態で治癒魔法を使うと、無いに等しい魔力と体力を根こそぎ奪ってしまうかもしれない。だからまず、スッスが作ってくれている粥の上澄み——重湯^{じゅうとう}っていうんだけど、それに完全^{リデュアル}回復^{リデュアル}薬を一滴だけ垂らす」

治癒魔法を使うには対象者の体力と魔力が必要になる。

健康な冒険者がどこかしの骨を折った程度なら治癒魔法で治せる。部位欠損なら完全^{リデュアル}回復^{リデュアル}薬をぶちまければ腕はくつつくし、もし欠損した部位を失ったとしたら生えてくる奇跡の薬。瀕死の重傷も然り。

しかし衰弱した病人に素人が治癒魔法を使うのはご法度。殿下の身体は治癒魔法ではなく水分と

栄養を求めているのだ。

ユグルの民に魔法の扱い方を教わった今だからわかるのだが、魔法のことをよく知りもせずベルカイムの元貧民街で治癒魔法を使ったのは無謀だったな。治癒医師でもなくせに病気を治したのだから。

魔法といってもきらきらぴゅるりん☆と、なんでも解決できる万能の存在ではないのだ。

イメージ次第で威力を操作できるが、少しでも間違えれば治癒魔法でも毒になる。

肥えた人を痩せさせる魔法は存在しない。痩せた人を肥えさせる魔法も存在しない。

ここまで痩せ細った殿下にはこれ以上何かしらの合併症が出ないよう、様子を見ながら治癒魔法や回復薬^{ポーション}を併用しながらの治療になるだろう。治癒医師や専門家を入れて治療をせねば。

使えるものは国王陛下ですら使う俺だが、こういう時安易に神様たちを頼りはしない。

炎神あたりに頼んだら殿下は一発で快癒するのだろう。しかしここは人の領分。何らかの神や精霊が原因だったら遠慮なく頼むんだけども。

「たった一滴か？ もつとこう、飲ませることは叶わぬのか？」

「殿下の体力を戻してからじゃないと無理なんだって。壊れかけた魔道具に魔力をたくさん注いだところで魔道具は直るわけじゃないだろう？ 殿下の身体に体力が戻って、様子を見ながら回復薬^{ポーション}を服用させる量を調整しないと」

クレイの焦りはわかる。

わかるがしかし、完全回復薬^{リディアル}はまだまだ未知数。究極の万能薬ではあるのだが、栄養失調の人間にぐびぐび飲ませるのは怖い。調査先生^{調査先生}が一滴と言っているのだから、俺は調査先生^{調査先生}を信じる。

俺の例え話で納得できたのか、クレイは苦しそうに目を瞑^{つむ}った。

「兄貴、できたっす！」

「スッス、粥の上澄みだけを別の皿に入れてくれるか？ 今はそれを食わせる」

まさか粥の上澄みだけを食わせるのかとスッスが驚いた。しかしスッスは反論せず、俺に言われた通り小皿に重湯を入れて再度持つてきてくれた。

「タケル、これだけ痩せ細っておるのじゃぞ？ もつとこう、力の出るものを食わせるべきなのではないか？」

「プロライト、考えてみる。ユムナが体調を崩して熱を出したとする。そんな弱っている病人に肉の丸焼きやじゃがバター醤油が食えると思うか？」

「むむっ、それは無理じゃな」

「ピユウー……」

俺がプロライトにわかりやすく説明すると、何故か全員が深く頷いて納得してくれた。

いやいや、トルミ村は緑の精霊王^{リベリアリナ}と馬の神様^{アネキ}の祝福があるから病人は滅多に出ないとはいえ、自分に置き換えて考えることもできるだろうが、皆とんだ健康なのさ。

俺は前世で盲腸の手術を経験しているからな。

手術の翌日は絶食で、手術の二日後の昼から重湯を食べた記憶がある。元同僚はお粥だったと言っていたので病院によるのだろう。栄養失調の人間にいきなりエナジードリンクを飲ませるのはご法度、くらいの知識だけでも。

アシユス村の住人も栄養失調ではあったが、歩けるだけの体力はあった。そういう人には消化の良い食べ物を食べさせて、それからゆっくりと固形物を食べさせれば良い。

「タケル、俺は今……加減をすることが出来ぬ。すまぬが殿下の介助を頼む」

クレイはごつごつとした己の両手を悔しそうに見、俺に頭を下げた。

ドラゴニユートの手だけのせいではない。心配で手が震えたまま止まらないからだろう。

「頭なんか下げるな。適材適所。病人の相手は俺が慣れているからさ」

少なくとも栄養失調に対する知識はあるのだ。

俺は今だけはと変装を解き、元の「素材採取家のタケル」の姿に戻った。俺に倣い、クレイたちも慌てて変装を解いた。特にクレイは鱈獣人のままより、リザードマン……ではないが、まだ殿下の記憶に残るクレイの姿でいるほうが良いだろう。

俺は腕まくりをし、細く繊細な殿下の上半身を抱えた。なるべくそうつと、ゆっくりと。

あとで外傷だけでも治させていただこう。この打撲痕は痛々しくてならない。

「サテル殿下、こんにちは。俺は素材採取家のタケルと申します」

俺の言葉が殿下に聞こえているかはわからない。だが、見ず知らずの人間に何かを食わされるの

は怖いはずだ。

「俺は貴方の忠臣であるギルディアス・クレイストンの友人であり、冒険者仲間です」
クレイの名前を出すと、殿下の瞼が僅かに震えた。

「反応がある。クレイ、サテル殿下に声は届くぞ」

「でんっ……!」

「小さい声でな」

「ぐううっ」

病人に大声はご法度。

「で、殿下、サテル殿下」

できるかぎりの小声でクレイが殿下に囁くと、殿下はほんの僅かに目を開いた。

乾ききつて血が滲む唇を小さく開き、震える。

「ご無理はなさらないください。俺——私ギルディアス・クレイストンは、殿下のお傍におります。殿下の憂いはこのギルめが全て払って御覧に入れましょう。この場に居るものたちは全て信頼のおける仲間でございますれば、今はごゆるりとおくつろぎ下さいませ」

クレイは涙を流しながら、震える声で力強く殿下に言った。

サテル殿下は——頬に涙を落とした。

身体に水分なんてほとんど残っていないだろうに、それでも涙を落とした。

その涙は喜びなのか、苦しみなのかはわからない。

だけど殿下はクレイの声に反応できた。よしよし。記憶障害とか洗脳とか、そういう最悪な状況まで考えていたのだが、記憶はしっかりしているようだ。声も聞こえるから聴力も問題なし。良かった。

クレイは殿下の手にそうつと触れると、どぼつと大粒の涙を流した。クレイはこの見た目でかなり涙もろいのだ。

「殿下、なんとお勞しいお姿……ぐすつ」

「クレイ、今は殿下に少しでも食事をしていただかないと」

「ずびつ……うむ、すまぬな」

「ビュプウウ……」

「ビーも泣かないの。プロラツ……お前も泣いているのか。スツスまで？」

クレイと殿下の涙に釣られたのか、ビーをはじめ俺以外全員泣いている。蒼黒の団は皆揃って涙もろいんだから。

涙をこぼさないように目をかっぴろげて唇を噛みしめるものだから、俺は笑いそうになっちゃった。

こんな状況でも笑えるということは、殿下はきつと助かる。根拠は無いが俺の勘はよく当たるのだ。

クレイと殿下の見えない絆というか、クレイが声をかけたとたん強張った殿下の身体から力が抜けるのがわかった。

何年も離れていても、この二人は主従なんだな。

仲間が大切に思う人は大切にせねば。

「これから殿下に栄養のある重湯、汁を飲んでいただきます。飲むだけで良いので、ゆっくりと飲み込んでくださいね」

匙ですくった重湯を殿下の前に見せると、殿下は僅かに頷いてくれた。

＋ ＋ ＋

完全回復薬を僅かに一滴。

たったそれだけを混ぜた重湯の威力はすさまじく、殿下の身体を蝕んでいた骨粗鬆症と不整脈と気鬱と意識喪失とあと『十日で死ぬかも』の調査結果は覆った。

圧倒的に栄養が足りていない飢餓状態ではあるし、貧血の症状も変わらない。だけでも再度調査先生にお伺いを立てると、危険な状態に変わりはないので目を離しては駄目とのこと。

ともかくにも、殿下の余命は延びた。予断を許さない状況であることは変わりないが、ひとまずは安心。

俺が頼んだ通り、プニさんは馬車をどこかの森の奥へと引いてくれた。

深く薄暗い森はやたらと魔素が濃く、こういう場所はランクAのモンスターが跋扈しているため手練れの冒険者でもあまり寄り付かない。

生えている草木の植生が東の大陸とは異なるのか、見たことのない大木や草花が生い茂っていた。ああああ、あそのカエドっぱい葉っぱが気になる。そっちのやたら大きなタンポポも気になる。薬効があったりするのかな。食えるのかな。ところかまわず調査したい。

素材採取家の血が騒ぐのを我慢しながら馬車の外に出る。鞆から魔道具を取り出すと、近寄ってきたビーが何をしているのと頭を傾げた。可愛い。

「ビュイ？」

「うん？ これは、ユグル魔法研究隊に試験を頼まれた結界魔道具。冒険者が野営するとき安心して過ごせるよう、クレイが魔法研究隊に頼んで作って貰った品だ」

「ビュウウー」

試験的に作って貰った結界魔道具はテントを張る時の固定器具、ペグを真似ている。地面に真つすぐ刺さず、少し内側に傾かせるのが肝。ペグの先端に結界魔石を埋め込んでいるので、そこから結界魔法が放たれるのだ。三つだと三角形の結界になり、四つだと四角型。

結界魔道具が実用化されたら冒険者ギルドや商業ギルドに安価で卸す予定。命に関わる魔道具は生活用品の一つとしたい。ランクDくらいの冒険者が真面目に依頼を受け続けたら購入できる額に

設定してもらうのだ。商業ギルドへの登録等は魔法研究隊に丸投げした。

「念には念を入れよう。馬車の結界は恐ろしく強いが、ダークスラグみたいな強敵には敵わないかもしれないからな」

「ビュウー！」

ビーに頼んで馬車の四方に結界魔道具を置いてもらおうと、それを起動。ついでの幻惑の魔法で馬車を隠す。

それにしても何処だ此処は。スッスの故郷、オゼリフ半島のオーゼリフの森に似ているが、神聖さは感じられない。エルフの隠れ郷とも雰囲気が違う。それこそ、サスケがいなくなった今、俺たちに地の利はない。

殿下はしばらく馬車の客室で安静にさせるとして、幻惑の魔法があるとはいえ馬車を野ざらしにしているのは危険な気がする。

帝国の次期皇太子殿下を匿っている時点で蒼黒の団——帝国に入国したのはバイリー商会の商人一派に化けた俺たちだが、殿下の命を狙う連中の敵に回ったわけだ。

蛇が隠れてどうのこうのな連中の正体がわからないため、俺たちは帝国内で好きに動くことができなない。

さてさて。

巨大な大木と見慣れない草花に隠されたこの森は何処なのか。

「調査先生、ここは何処でしょうか」

「ストルファス帝国 マールシエベルダ領 マイユ東の森 最深部」

ランメルト・ププチェリケ・マールシエベルダ辺境伯（四十二歳）の領地。しかし、最深部は前人未踏の地であり、禁忌の森とも呼ばれている。

ストルファス帝国領土の最北に位置する広大な地であるが、都心部はベルカウムに比べて豊かではない。

ププチェリケ辺境伯、愛称プププーはワディランテ・デオスイラゲル・シヨペン公爵の友人であり、帝都リンベルグ大学を卒業した学友。

……………愛称プププーとかどうでも宜しいんですけど調査先生。

禁忌の森かあ。物騒な名前ではあるけども、絶体絶命の危機を覚えるわけではないので結界の外に出なければ大丈夫。

それよりもシヨペン公爵というのはクレイの知己であり、サテル殿下の窮地を知らせてくれた人ではなからうか。

この地の領主は殿下の味方ということで認識しても良いのかな。プニさんのことだから、俺たちが困るような場所には連れてこないだろうとは思っただけ。

「ピューピュプツ」

ビーが何かの気配を察する。

俺のうなじもチリチリと嫌な予感をさせているので、まだまだ安心とは言えないだろう。姿は見えないが、そこかしこからモンスターの気配がする。幻惑の魔法でこちらに気づいていないだけで、一瞬でも隙を見れば襲い掛かってくるはずだ。

うーん。どうするかな。

結界魔道具と馬車の結界は易々と壊されまいだろうが、殿下の看病は不寝番となる。交代で見張りを立てるとしても、瀕死の殿下には申し訳ないがそのままこの場所に留まり続けるわけにはいかない。結界魔道具の魔力はこの場所の濃い魔素を充填すれば良い。幻惑魔法も幻惑魔道具を作るとして。だとしてもだ。

クレイには申し訳ないのだが、俺たちが殿下の傍で看病を続けるのは難しいだろう。

俺たちが帝国に来たのは、商人として商売をするため。そして、サテル殿下の様子をシヨペン公爵に伺うため。あわよくば殿下を救うためだったのだが、これは既に目的を遂げた。

心配だし不安は常に付きまとうだろう。

だがしかし、殿下と俺たちは行動を共にすることはできないのだ。

「タケル」

馬車の中から出てきたプロライトは、桶に入った水をそこの藪へと撒いた。

「サテル殿下の呼吸は落ち着いて、今は眠っておられるようじゃ。完全回復薬のおかげじゃな」

「それは良かった」

「クレイストーンが付きっきりで離れようとはせぬ」
「だろうな。」

元主とはいえ命を懸けて守った相手。騎士道なのかクレイ流のサムライ魂なのかはわからんが、ここでサテル殿下を置いて次の行動へと移すことなどできないのだろう。

「クレイも人だったんだなあ」

「何を言うておるのじゃ。クレイストーンはああ見えても情に厚い御仁であるぞ？」

「知っているけど、我が子のように心配しているから」

「リザードマンの子はあそこまで痩せ細ることはないからのう。人の子はどの種族よりも弱い存在じゃろう？ ゆえに、不安なのじゃろう」

まさか本当にクレイの子供だった説はないよな。うん。クレイの子供だったら調査先生が教えてくれるはずだ。うっかり妙なことを口にしたらクレイのげんこつが落ちる。

「幼少期の成長を見守り、守護していた存在だからかね。実の子供であるギンさんは放置していたっていうのに」

「それは言うてはならぬぞ。わたしも気になるのじゃが、言うてはならぬ」
俺とブロライトは互いに細い目をして遠くを眺めた。

触れてはならないクレイの過去に、クレイの実の子であるギンガさんの存在がある。

ギンさんは親のいない双子のちびっこリザードマンを引き取り、リザードマンの郷で冒険者ギルドの受付としてつましやかに暮らしている。趣味は釣り。

リザードマンは基本的に海や川に入って手づかみでの漁になるため、わざわざ糸を垂らしてのんびり竿釣りをするリザードマンは変わり者とされているのだが、本人は竿釣りを俺に強く勧めてきた。辛抱強く待つことが少々苦手な俺としては、釣りはあまり得意ではない。雷の魔法でちょよいつと魚を麻痺させれば、なんて楽な道を選んではしまう。

ギンさんは双子と共に近々トルミ特区にて竿釣り専門店を開店する予定。少しでもクレイの近くでと移住を勧めたのは俺です。

「騎士とは親や家族よりも仕える主のために命を懸けるものじゃ。故に、クレイストンの元騎士としての忠誠心のようなものなじゃろう、あれは」

「そんなものなのか」

家族がいるのなら、家族も大切にしたいと思うが。そこは前世の知識を持っている俺とマデウスの価値観の違いなのだろう。

「ピュイ」

ビーが落ち着きなく結界の外を警戒している。

ブロライトもモンスターに囲まれていることは気づいているのだろうが、馬車と俺の結界を信じ

切っているため警戒はしていない。

「さてさて、どうするか」

パチンと手と手を合わせると、俺は自分の立っている地面をじりと眺めた。

ここで転移門を設置するのは簡単だが、周辺はビーが警戒を解かないほど強いモンスターがいる。魔素も濃厚。万が一にも結界が解けてしまった場合を想定して、できれば転移門は隠しておきたい。一応ここは他所様の領地なわけだし。

このまま殿下を馬車に乗せて帝都に近づくのも憚られる。何処で魔法を見破られるか、わかつたもんじゃない。もしも殿下を保護しているのがバレたら責任を追及されてしまう。

それにいつ何時悪漢が襲ってくるかわからない。

襲ってくる者は正当防衛で蹴散らすだろうが、俺たちは商人として帝都に赴くわけなのでね。そういう問題はできれば抱えておきたくないわけだ。問題に首どころか全身を突っ込んだ状態で今更なのは否めないが。

ベルミナントやグランツ卿に相談するのはお門違い。なんせ国が違う。

それならば俺たちは殿下を信頼できる医療班に任せ、馬車で予定通り帝都を目指すべきだ。そうしてシヨペン公爵に面会を願い殿下のことを告げ、できれば帝都にも転移門を設置させていただく。殿下をトルミ村に運んでしまえば話は早いのだが、そう簡単ではない。殿下の容態を思えばトルミ村の治癒魔法師・医師・薬師によるトルミ医療班に任せたほうがクレイも安心できるだろう。だ

面倒なことにならないよう、面倒なことをするのが俺のモットー。
「地上が危険なら地下はどうだろう」
「ピエー」
「穴を掘って、クレイが通れるくらいの転移門を設置すれば良くない？ そうしたら地上への入り口だけに結界を張れば良いから。これだけ深い森の中だ。冒険者もなかなか寄り付かないだろうし、用もないんじゃないかな」
見渡す限り雄々しく生える木々や草花。採取家が頻繁に訪れているのなら道が作られているはず。冒険者が野営をした跡も無い。
調査先生が『前人未踏』と言ったのだから、ここは領内でも手つかずの森ということだ。
もしもコルドモールのような巨大モグラがいた場合、その計画も頓挫するのだが。
「プニさんどう思う？」
「プニさんどうもつちやと口を動かしながら頷いた。

「おぶっふ！」

飛び出した勢いのまま俺の腹に頭を突っ込んだコタロ、続いてコタロの側近であるジンタ、遊撃隊の隊員であるゴロベ、ポチタ、シロタ、クロタ、ムギタが俺の上に乗った。一族全員で来たわけではないが、遊撃隊精鋭部隊総出で来たな。とうかコタロはコポルタ族の王子なんだから、立場というものを考えてだな。きつと考えていないんだろうな。

「コポルタゆうげき隊、呼ばれたから来たのだ！ ぼくたちが来たからには、どんな岩でもくだいてしまおうのだ！ わおーんっ、わんわんっ！」

「わんわんっ！」

「わおーん！」

「ピュプ……」

張り切り尻尾をブン回すコタロを筆頭に、コポルタ遊撃隊は張り切つて警戒態勢を取つた。その勢いにビーが引いている。

「いや待て。待て待て。お待ちなさい。モンスターと戦うわけじゃないから。頼みたいことがあつて呼ばせて貰つたんだ」

さっきのメデタイ鳥笛の音は、コポルタ遊撃隊を呼ぶための魔道具だ。トルミ村へと続く転移^{ゲート}門で笛を鳴らせば、あつという間にコポルタ遊撃隊が飛んでくるといふ仕組み。

戦場で各々独自の考えで行動をする一般的な遊撃隊というより、対モンスター戦において素材を

素早く回収する隊なんだけどね。コポルタ族は鋭い爪や牙を持っているが、戦闘に不向きです。

穴を掘るだけなのだから、三、四人くらいで良いんだけども。

「ぼくたちも戦えるのだ」

「おつきなモグラとの戦いの時よりもがんばつたよ」

「たくさんいるんなもの集めるよ」

「ピュ……」

やる気があるのは大変宜しいのだが、俺の身体を足蹴にしながら言うんじゃない。ビーが呆れているじゃないか。

「はいはい、よーしよしよし、落ち着いて。これから皆に穴を掘ってもらいたいんだ」

「穴？」

「穴を掘るのか？ 得意だぞ！」

「わんわんっ！ どの穴を掘るの？」

「たくさん掘つていいの？」

「あー！ スッス！ スッス見つけたー！ スッス、穴掘りきょうそうだぞー！」

「きょうそうだぞー！ わんわんっ！」

落ち着けや。

騒ぎを聞きつけたスッスが馬車から降りてくると、一部のコポルタたちがスッスに突撃。スッス

は喜ぶ前にコボルタタツクルを受けて吹っ飛んだ。あれは痛い。

俺が助けてもらいたい時に笛を吹くからと言ったのが間違いだったのか？ いやそれでもコボルタ族の穴掘り能力は長けているからな。もしも急に穴掘りが必要になった時のためにと思って笛の合図で転移門を渡るよう頼んでいただけなんだけども。

急に穴掘りが必要なことはあるのかと問われれば、モンスター毒や麻痺に効果がある木の根っこがありましてね。コタロたちはその根っこを採取するための穴掘りに長けているのだ。

やれやれ予想以上に大勢で来たものと苦笑っていたらば。

「おうおうっ、コタロたちが装備を整えて転移門に向かったとなりゃあ、何かあったんだらう？俺も交ぜろや」

「おうおうっ、何か面倒なモンでも採取すんのか？ 丁度暇していたんだ、手伝わせろや」

吹っ飛んだスッスの安否を気遣う前に、転移門からヒゲもじやの兄弟がぬるりと出てきた。ドワーフのアゲートとゴーム兄弟。

「ストルファス帝国に赴いたと聞いていたが、何用得コボルタを呼んだ」

続いて出てきたのは俺を睨むエルフ族のベルク。トルミ駐在員で弓隊のエルフを数人引き連れている。何で俺を睨むのさ。全ての元凶や問題を俺のせいにするのはやめろ。

「皆の者、大勢でタケルを困らせてはならぬ。さてタケル殿、ここはストルファスなのか？」

「あまりトルミの森と変わりはないようですね」

ユゲルの代表ネフェルは翼の戦士イエラを伴い転移門から顔を出す。

「ちよ、ちよっと、なんでこんな大集合することになった！ 転移門はこれで閉じるから！ おしまい！」

まさかエルフの執政であるアーさんや、ルセウヴァツハ領の領主ベルミナントまで来ていないだろうと確認し、トルミ村の転移門の前に装備をきっちりと整えた戦闘大好き連中が大勢詰めかけているのに愕然とした。違うんだ。俺はただ、穴掘り名人であるコボルタたちに穴を掘って欲しくて。

これ以上不法入国させるわけにはいかないと、俺は慌てて門を閉じてしまった。

門が閉じる前に大勢のプーイングが聞こえたが、知るか。

「コボルタ族が突然昼餉を投げ出して走り始めたのだ。何事かと慌てるであろう」

「昼飯の最中だったのか。それは申し訳のないことをした」

何故かネフェルに咎められてしまい、俺は頭をかきながら詫びる。

「わんわん、タケルの合図は遠く離れていてもよく聞こえるのだ」

「てつだえることがあるならご飯よりだいいじだよ」

「ご飯もほしいけど」

帝国ではそろそろ日が暮れる頃。

世界地図を見たことがないからマデウスの地理はよくわかっていないが、西の大陸と東の大陸は

経度が違うのかな。経度が十五度変われば一時間の差があるというし。あくまでも地球での話なので、不思議世界マデウスでは解釈が違うのかもしれないけども。

これは昼飯を御馳走しないとならないかな。穴だけ掘ってさっさと帰れとはいづらい。

「おう、タケルよ。コボルタを呼んで何をさせるつもりだったんでえ」

巨大な槌^ちを背負ったアゲートが俺に詰め寄ると、ゴームが顎髭^{あごひげ}を撫でながら俺を睨む。

「ここは魔素がちいと濃いぞ。トルミの森奥よりも酷えや」

「大物がわんさと取り囲んでいやがるな。おうおうっ、こりゃあ腕が鳴るぞアゲートよ」

「帝国のモンスターはどんなもんなのか、狩り比べといこうやゴームよ」

だから食用肉は事足りているから、狩りをするつもりはないんだって。

トルミ村で消費するのなら構わない……いやいや忘れるな。ここは！ 帝国！

わいわいがやがやと馬車の周りでわめく連中をネフェルが咳払い一つで制する。

「皆、静まれ。何用得コボルタに召集をかけたのか問うても良いか？」

人格者が一人でも来てくれたのは幸い。

いや、呼んでいないけど。

トルミ村では目上の言うことは聞きましようの精神がある。ネフェルはこの場にいる誰よりも最年長——プニさんを除いて——のため、エルフのベルクですら黙った。

「えーと、あまり大勢を巻き込みたくないって言いますかね」

「また面倒ごとを抱え込んだのか」

ベルクに呆れたように言われたが、俺は反論。

「違う。面倒ごとがやってきたんだ。面倒ごとって言うのも失礼だな。この場合、外交問題に発展するかもなので、あまり関わらない方が宜しいかもしれませんよーという」

「お前、エルフに外交を問うのか？」

「おう……」

そうだった。ベルクの言う通り、エルフ族は不可侵の種族。東西南北や他の列島などにエルフ族は点在しているが、どのエルフ族にも手出しは無用というのが世界共通の認識。

つい最近、郷の外に出るようになったくせして。

「何を考えている」

「いえなんでもありません」

ベルクのじつとりとした睨みを無視し、俺はコタロを抱き上げて背中をわしゃわしゃと撫でながらネフェルたちに言った。

「ここはストルファス帝国内だ。だから、蒼黒の団……じゃない、バイリー商会以外は不法入国であることは理解してほしい」

「応よ」

「何を狩ればいい」

「何も狩りません。この、この地面を掘って転移門と診療所を設置したいんだ」

俺が足で地面を叩くと、アゲートが首を傾げる。

「穴を掘るのか？　こんなところに？」

「ここ以外の安全な場所に心当たりがなくてね。なんせ現在地は帝国。誰が敵で誰が味方なのかは魔法でわかるけど、不意打ちされたら大変なことになっちゃう人物が同行しているんだ」

そうして俺は現状を皆に説明した。

帝都に向かっている最中、クレイの元主である皇太子殿下を救ったと。

そして、殿下のお命が危ぶまれているのだと。

＋　＋　＋　＋　＋

馬車はのんびりと街道を進む。

大きな雲が太陽の光を程よく遮り、ぼかぼか陽気に臉が重たくなるが警戒心は解かない。

時々甘い花の香が鼻をくすぐるので、街道沿いに植えられている謎の白い花の匂いなのだろう。見た目はツツジに似ている。

俺たちは再び変装をし、バイリー商会として帝都を目指しているところ。

「ピューピューピュー」

ご機嫌で空を飛ぶビーの姿は霽がかって見えにくくなっているはず。

ビーはドラゴンの子供ということで珍しいどころの騒ぎではない。王都ではビーの身体に触れることは禁止されているが、帝都ではそんな暗黙の了解はない。ビーの存在そのものを秘匿したいが、ずっと隠れているわけにはいかないお子さんなのでビーの身体全体に幻惑魔法をかけて姿そのものを惑わすようにした。これで好き勝手に空を飛んでも捕まえることはできない。

ビーの幻惑魔法魔道具に魔力登録をした俺たちには、ビーの姿が見える安全仕様。

「ピューピュー？」

「もう少し先だと思っぞ」

帝都はまだかまだかと落ち着きなく催促をするビーに、俺は穏やかに答える。

トルミ村から王国の首都に至るまでの街道はそこそこ整備されていたが、トルミ村からトルミ特区までのトルミ街道ほど整地はされていないようだ。あのトルミ街道を頑丈にしたのは俺だからな。朝から晩までこき使われ……いや、頑張って整備させていただいた。

この街道に転圧魔法を叩きこみたくなったのは、さんざんトルミ街道を整備した名残だろう。

「うぬうう……」

ガタガタガタガタガタガタ……

プニさんの引く蒼黒の団専用馬車『リベルアリナ号』は、地面から少しだけ浮かんでいる。おかげで振動は一切感じない快適無敵の馬車なのだが。

「クレ、クレイ、クレエイイイイイ」

「うぬうううう……」

「そ、その、それ、やめ、やめ、やめい！」

御者台に座っていた俺とクレイだったが、落ち着きのないクレイの貧乏ゆすりが御者台を激しく揺らしていた。

クレイの頭上をゆらめくハムズたちは相変わらずのんびりと浮かんでいる。

「ピュププププ……」

ビーはその振動が楽しいらしく、クレイの頭の上に乗ってご機嫌。

俺がクレイの膝にゲンコツを落とすと、クレイの貧乏ゆすりは止まった。そして黙ったまま背にしていた紅い筒に手を伸ばす。

「槍をふるうのも禁止」

「ぐぬうっ！」

「幌ほろの上で腕立て、腹筋くらいなら許す」

「むっ」

「ピュー！」

何かしてないと落ち着かない気持ちは痛いほどわかる。

いや、わかるだなんて簡単には言えない。お陰様で俺が大切にしている人たちは健康そのもので、

危機的状況にあるわけではない。

クレイの心配の種であるサテル殿下は、今密かに療養中。

ストルファス帝国マールシエベルダ領マイユ東の森の最深部にぼっかりと開いた空き地に、コポルタが深い穴を掘ってくれた。その穴の補強は木工に強いエルフが立ち会い、天井と壁と床を全て木で覆った。力仕事はドワーフが手強い、入り口が付いた立派な洞穴を魔法で崩れないようにしたのはユグル。

トルミ最強建築団の力により、秘密裏に地下医療室が完成した。ぶっちゃけ、ベルカイクにある医療施設より立派です。

殿下はトルミ村から派遣した医療班により徹底的に管理され、一日一滴の完全回復薬リディアを混ぜた重湯を食べさせて貰っている。

そもそも帝国内に隠し転移門ゲイトはいくつか設置する予定だった。地下室を作って。コタロに笛の音を聞いたら転移門ゲイトを使って俺たちの元へ来るよう頼んだのも、この計画のため。

サテル殿下を隠すために洞窟を作ったが、隠し転移門ゲイトを設置する予行練習となってしまったのは不可抗力。

「ふん！ ふん！ ふん！」

「ピュ！ ピュ！ ピュ！」

乾燥しまくってところどころ瘡蓋かさぎたになっていた肌も、ユグル魔法研究隊によって開発された香料

入りの軟膏なんこうを塗ったことにより改善されたという。軟膏には少しだけ回復薬ポーションが入っているので、保湿剤と合わさって軽いあかぎれ程度なら治してしまう優れもの。

「ふうんぬ！ ふうんぬ！」

「ピユイイー！ ピユツ」

あの保湿剤は全身に塗れるので、貴族の間では高値で取引されている人気商品。庶民でも手が届く品も展開中。『これ以上ルセウヴァツハ領内で名産品を作らなくても良い』と嘆いていたベルミナントではあったが、ベルミナントの奥方様であるミュリテリアの肌がつるべたになったと評判なのは聞かないことになっている。

「ふんぬぬぬぬ」

「ピユプププ」

「うるさい！ 何してる！」

「うぬっ！」

「ピッ！」

御者台に足をかけ、幌の上のやかましい二人を咎める。

クレイは片手人差し指で逆立ちし、腕立て伏せをしていた。指立て伏せ？

ビーも真似して指立て伏せするな。無意識に羽ばたいてしまう翼があるのだから、それで筋力は鍛えられないだろう。

「しかしタケル、俺が呑気のんきにこうしている間も殿下は」

「なんだよそれ。トルミ最強医療班の皆を信用していないってことか？ トルミ特区の医療班はグランツ卿が王都の医師団より立派だって褒め称えていただろう」

褒め称えていたというより、羨ましがっていたのだが。

「信頼していないわけではない」

「大体、クレイが傍にいて殿下に何をしてあげられるんだ。俺だって殿下の容体は心配だ。だけど、俺やクレイは図体がでつかいからあの洞穴では邪魔になる。手先が器用なエルフや世話焼きなアルナブ族に任せれば良いんだ」

殿下の看病をしている人には、殿下の正体を話していない。アルツェリオ王国の国民であるトルミ村の住人にもだ。ついでに村長やベルミナントといった政治に関わる人を巻き込むことも禁止した。

エルフ族は不可侵の種族。ユグル族はトルミ村に移住したとはいえ、アルツェリオ王国国民とは認められていない。ドワーフ族はドワーフ国の国民だし、コボルタ族とアルナブ族は獣人というくくりだが、市民権はあれど王国の政治とは無縁。

医療班の皆は自分が誰を看病しているのか薄々気づいてはいる。だが、誰しも俺たちに患者の名を問おうとはしない。慎重な手つきで殿下の額の汗を拭っていた聡いエルフなら正体に気づいているかもだが、アルナブ族たちはどうだろうか。あらあら大変ね、新鮮な草を食べないと、なんて

言っていたからな。

クレイが、榮譽の竜王と謳われた歴戦の勇士が案じる相手。それすなわち以前の主——と。

「俺たちがすることは、帝都を目指すこと。シヨペン公爵に殿下のことを伝えること」

「うむ……」

「ピユイ」

「帝都で俺たちバイリー商会は店舗を構え、魔法トッセルの中着袋バツグの販路を開かないとならないことは理解しているよな？」

「うむ……」

「ピユイ」

「ついでに聖竜騎士サントドラゴンナイトのグッズ……」

「何？」

「ピユイ」

いけないいけない。これはクレイに言っちゃいけないやつ。ビーに言っちゃ駄目と咎められ、俺は慌てて両手で口を塞いだ。やべえやべえ。

港町ユーヨンにあれだけのクレイストーングッズが売られていたんだ。きつと帝都ではもつとたくさんさんのグッズを扱っているはず。

俺の鞆の中だけでも、ユーヨンで売られていた聖竜騎士グッズがたくさん保管されている。スツ

スとプロライトの鞆にもこれでもかと詰められているだろう。だがしかし、クレイを慕う人たちに配るには足らない。クレイはトルミ村で聖竜騎士グッズを扱うことを嫌がっているからな。

「とにかくにもだ。俺たちがサテル殿下の傍にいても役に立たない。それなら、何故サテル殿下があんな目に遭ったのか知りたいとは思わないか？」

「なぬっ？」

「なぬじゃないよ。考えて御覧なさいな。シヨペン公爵からの手紙で俺たちは帝国に来ることになったろう？ 手紙の内容は貴族独特の言い回しで俺はよくわからなかったが、救難を求めていると調査先生は教えてくれた」

「うむ」

「具体的な内容は書いていなかった。いや、検閲の関係で書けなかったんだろう。シヨペン公爵の立場が帝国で悪くなつては元も子もないからな。既に危うい立場なのかもしれないけど」

「なんと！」

そのくらは想像できると思うのだが、クレイは政治のあれやこれやを考えるのは苦手なのだろう。帝国の中枢チウシュウで働いていたというのに、腹黒い貴族の思考には染まらなかったようだ。良くて純粹。悪くて単純。俺も人のことは言えないけども、クレイよりお腹が黒いことは自覚している。

どれだけ帝国の内部が情報統制されていようと、帝国の偵察部隊が暗躍しようとも、既にサテル殿下の身柄は確保済み。まさか国内の辺境の森の洞穴で療養中だとは想像もできないはずだ。

殿下には申し訳ないが、最強の切り札を持っているのは俺たち。

もしも帝国内で俺たちの正体がバレて面倒くさいことになったとしても、実は次期皇太子殿下の身柄は俺たちが押さえていて、しかも栄養失調と暴行の痕多数で監禁されていたんです！ どうするんですかー！ という、手段が取れる。最終手段だけでも。少なくとも殿下が健康になつて歩いて走れるようになるくらいまでは、殿下の療養場所を隠し続けるつもりだ。

「帝都に到着したら直ぐに貴族街へ向かう」

「えっ」

「商会証明書を出せば帝都に入る際の検査も簡易的なものとなる」

「あっ」

「寄り道などせず、シヨペン公爵の屋敷へ向かう」

「ええー」

「ピュイイ……」

帝都って帝国の何処よりも発展していて、何処よりも賑やかなんだろう？ それだったら、色々な店があるだろうし、出店とか、屋台とか。すごい建物とか、でっかい聖堂とか。

呑気に観光をしたいわけじゃないけども、新天地だぞ？ 西の大陸の最大都市だぞ？ もっとさ、情緒とか、そういうのあるじゃない。帝国でしか採取できない素材の調査だつてさせてくれよ。

「タケルー！ あれなるは我らが目指す帝都ではないのか？」

馬車の窓から上半身を外に出し、窓枠に腰かけるプロライトと、別の窓から顔を出すスッスが指さす先。

相変わらずどんな視力しているんだと思いつながら、街道のはるか先、地平線の中央にゆらめく陽炎^{かげろう}。

じつとりと凝視してみると、遠目にもわかる巨大建造物が見えてきた。

門……門なんだろうけど、門の手前に巨大な騎士のような誰かさんが巨大な剣を大地に突き刺している像がどどんと。

「ピュイイ？」

「本当だな。誰だろうな。でっかあ……」

ビーが巨大像は誰かと聞くので、俺は巨大像を見上げながら無詠唱で調査^{スキヤン}先生にお尋ねしてみる。

【帝都コウド・デーラ中央門】

ストルファス帝国首都。

【皇帝】 オルジェターワ・ハウイラテル・ラテリアル

【執政】 ヴェーフエダイン・フォニー・アブラウステイリアナ七世

クレステン宮殿を中央に発展した都市。入り口の門を守る巨大立像は帝国創国者である
ボルドヴィッド・ローテリアルを模したものだが、実在のボルドヴィッド・ローテリ